
space war period GEARD

storick

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

s p a c e w a r p e r i o d G E A R D

【Nコード】

N 6 3 6 5 A

【作者名】

s t o r i c k

【あらすじ】

文明を発達させた地球人はラクラス星系という所へ大移民し、そこで暮らす事となった。しかし平穏は長く続かず、ラクラス星系全てを巻き込む宇宙大戦争へと発展してしまう。これは、戦争という場で苦悩する若者達の悲しい戦いの物語である。

ブローグ

宇宙。それは無限に広がる未知の世界。

人類は長い間、宇宙へ進出する事に手間取った。

しかし、その宇宙に何と人の形をした「物」が飛びかっていた。
一つだけではない。その数は

10や20を越す。その人の形をした物はいずれも銃のような物を持ち、銃身からは光の粒子　ビームが飛び交う。

それは正に映画でしか見た事のない夢の光景。だが、これは現実の出来事なのだ。

『おいルース、今日は調子いいみたいじゃないか』

通信機から男の声が操縦席に響き渡る。それを聞いて鼻で笑う少年はモニターに映る人型を一機、ビームで打ち落とす。爆発の閃光が眩しい。

少年の名はルース・ドラッド。蒼い髪と蒼い瞳、歳は10代後半、線の薄い輪郭は美形のそれを感じさせる。

「おいジョン、賭けてみないか？」

ルースは先ほど通信してきた男、ジョンに威勢のいい弾んだ声で通信する。すると何もない所から

四角いものが浮かび上がり、映像が映し出される。空間映像システム・ヴィジョンと言って、簡単に言えば

何も無い所から出て来るテレビ電話のようなものだ。特殊な電波が通っている所なら何処でも使用できる。だが

本当に何も無い所から出せる訳ではなく、機材が無ければ使う事が

出来ない。

そしてそのヴィジョンには盛り上がる金髪のアフロでニコニコ顔の男が映されている。この男が
ジョンである。

『何を賭けるんだ？』

「今日何機落とせるか勝負しないか？」

そんなのんきな話をしている間にも、ルースは抜群の技術で次々と敵軍の機体を撃破していく。

『おもしれえじゃねーか！ 今日こそお前を超えて見せるぜ』

ジョンは意気揚揚と、集中する為にヴィジョンを切る。
そんなジョンを見てルースは余裕の笑みを浮かべる。

「あんなに張り切っちゃって、…その後に負けた方が今日の昼飯おごるって言おうとしたのに…」

先走る友の安否を願い、ルースは無限に広がる宇宙を人型戦闘兵^ギ
器GEARDで
駆け巡っていった。

それは壮大な戦争の物語

人類はその科学力を一気に発展させ、地球を死の星へと追いやってしまった。そして二度と

地球のようにしまいと地球の全ての物を破棄し、新たな住処を見つける為に大移民を開始した。

そして何十年もの月日を重ね、ようやく見つけたのがラクラス星系だった。

ラクラス星系の惑星で原住民との交流を果たした人類は今やラクラス星系の一員となった。

だがある時、道を間違った者達が現れた。

その名を宇宙改革軍レノス。

彼らはギアードを創りあげた共和連盟センドラドを悪と称し宣戦布告をする。

時は宇宙戦争時代の幕開け、ラクラス星暦1063年。

それから時は過ぎラクラス星暦1093年、いまだに戦争は終わらない。

泥沼化した戦争の中、人型戦闘兵器ギアードは発展に発展を重ね戦争の火種を一気に

拡大させ、まさに宇宙全土を上げての大大戦争を繰り広げているのだ。

両軍の戦いは、更に激しさを増していく

#1: Departure vol.1 (前書き)

新作です。拙い文章ではありますがどうかお付き合い下さい。

#1: Departure vol.1

「くっそ〜〜！ また負けた ！ ……それにお前、昼飯おごりなら早く言えつての！」

ジョンは渋々これから自分の金で払わなければいけないテーブルの上にある

フライドポテトをかじる。彼の目の前では忙しそうに大量の食べ物を口の中に放っているルースの姿

があった。彼は自分の財布の中身は気にしなくてもいいので存分に胃の中を満たしている。

ここはルース達の所属する、惑星レードを管轄している部隊「セイバース」の基地の食堂。

セイバース隊はセンドラド軍に属する部隊で、日夜レード星に攻め込むレノス軍と戦っている。

この二人はセイバース隊でもトップの実力であり、ルースはセイバース隊で若いながら

エースと言われるほどの腕前である。

「まあ、そうほめんなって」

「クソがあ！」

憎たらしいルースの態度に、ジョンは激怒するが彼らのテーブルの前を通る美人によって

それは消化される。短く切りそろえた黒い髪は彼女に合い、特徴なのはその

右耳の前に長く垂らした髪がある所だ。顔は落ち着いており大人の雰囲気漂わせている。スーツは

セイバースの軍服で紫色のスーツもまた彼女に合っている。ジョンは口を開けたまま彼女を見つめていた。

「ヒュ、とびつきりだな」

ジョンが口笛を鳴らした頃には、彼女は食堂にはいなかった。ルースは彼女に違和感を感じていた。

「セイバース隊に、あんな人いたっけ？」

彼の言う通り、彼の記憶にはセイバース隊にあのような美人はいない。だがジョンは全く気にしなかった。

「別にいいじゃんか。うち等の女共とは大違いだぜ」

「だけれが、大違いですって？」

「！！！」

ジョンの背後より、ドスのきいた女の声が聞こえる。彼が振り返るとそこには茶髪の

ポニーテールと、左目の下のほくろが特徴の女性が立っていた。つなぎを着ている事から彼女はギアードの

整備士か何かを連想させる。そして彼女の目には、自分への愚弄くづうに対する怒りが燃えていた。

「オッス、ターニア（…怖！）」

「はあい、ルース」

その二人の挨拶とは対称に、ジョンはターニアの視線に完全に負けて、その隣に座る彼女に

怯えきっていた。彼は今日寝る時、枕を噛んで恐怖に怯え枕を濡ら

すだろう。

ルースはターニアに先ほどの女性について訊いてみた。

「ターニアは分かるか？ さっき食堂通って行った女の人」

「どんな人？」

「美人！」

即答するジョンをターニアはエルボードロップをかまして黙らせた。

「そつだなあ… あれでこれで…」

ルースはターニアに先ほどの美人の特徴を説明する。しかしターニアは首を傾げるばかりだ。

「うーん… 悪い、分からないな」

「そつか。それじゃあ新しく入った人なのかな？」

それっきり美人の女性についての話はなくなった。

「…そつだ、聞いてくれよターニアあ！」

突然、ポテトをかじりターニアに押し寄せるジョン。少し涙ぐんでいるのがいい歳して子供っぽかったがターニアはそれが少しウザかった。

「なつ、何だよ！？ ちょ、ウゼーよ！」

「それがさあ、今日のレノスの奴等とでさ、ルースが昼飯賭けて何機落とせるか勝負したんだよ」

「おいジョン、それじゃあ俺が無理やりやらせた感じじゃなかよ」

ルースはフライドポテトを啜えながら、テーブルに身を乗り出してジョンを責めた。しかし

そんな二人を尻目にいきなりターニアが笑い出した。それにジョンは驚き、ルースは首を傾げる。

「タ、ターニアさん？」

「どした？」

「アツハハ…そりゃジョンが負けるって。いつもそうだけど、ルースの『スピニオン』、好いパーツが手に入ってさ。ちよつといじってたんだ…」

「なににい!？」

二人はターニアの告白に驚いた。スピニオンとはルースが駆る愛機のギアードである。高速戦闘用で

敵味方共にその戦闘時の姿は『青き一閃』と呼ばれ恐れられている。

「んっ？」

ルースが振り向くと、そこにはただならぬ殺気を放ったジョンの姿があった。その顔は

笑っている様に見えるが、まったくの作り笑いである。

「金、返せ？」

ルースはジョンに恐怖を感じた。ここは何としても逃げなければ…というルースの考え出された結果は…

「あっ！ さっきの美人の人!!」

「ナニイイ!!!?」

ルースの指差す方向に、ジョンは異常な速さでそこに走りこんだ。
しかしそこには
誰もいなかったのだった。

「おいルース、居ないじゃないか！
…あれ？」

ジョンの振り向く所には、ルースは居なくターニアがそこに立っていた。

「おいターニア、
ルースは？」

「ハア」

ターニアは、ジョンの頭の悪さにため息をつかざるを得なかった。当然の本人はまったくわかっていない様子だ。

「バカか、お前は。ルースならとくに逃げたぞ」
「なっ…。あ、あのヤロ　　！！」

ジョンの叫びは、食堂全体に響き渡ったという。

「イイイイヤツホー……!!」

一方その頃、ルースは戦闘機型飛行ギアード・エベリィで空のフ
ライトを楽しんでいた。いわゆる

ルースの顔は何ともいえない開放感を表していた。それはまるで

無垢な子供が遊んでいるかの
ような、そんな感じにさせる楽しそうな顔であった。

「フウ、まったく、何か変だと思ったんだよね」今日のスピニオン
は。まっ、どうせパワーアップ
しなくてもジョンの奴なんかに負けないけどな」

と、言葉では平和的なのだが、ギアードの方は恐ろしく難度な飛行を繰り返している。上空から
急降下して、地面スレスレで浮き上げてから機体を2回転させている。誰が見てもぞつとする光景である。そんなアクロバット飛行を軽くこなしてしまうのだからル
ースはセイバース隊のエースなのである。

「やつぱ、飛んでいるとスツキリするぜ」 よーし、もつとぶ
っ飛ばすぞー！」

~~~~~

ところ変わってセイバース基地の「隊長室」。そこには別名「鬼  
の隊長」と恐れられている隊長  
エオード・オークが座していた。スキンヘッドに黒のサングラス、  
鬼髭面。そしてその厳しさ故に  
「鬼の隊長」と恐れられている。そこに、ルース達が食堂で見かけ  
た通った美人の女性が何やら  
エオード隊長と話している。

「なんと…レノスが密かに軍備拡張を…!!」  
「はい」

その女性の情報に、エオードは驚きを隠せないでいた。

「ううむ…奴らめ、最近手応えが無かったのはそのせいだったのか」

その時、電子音と共に隊長の前にヴィジョンが現れる。ヴィジョンには慌てた様子の隊員が映っていた。

「た、隊長！」

「何だ、今は会議中だぞ？」

隊員はどこか落ち着いていない様子で、報告にためらっているような感じも受ける。

「そ、それが…」

「どうされたのですか？」

丁寧な口調で女性は隊長に語り掛けるのだが、まだ隊長は隊員から事を聞いている。そして…

「なにい！？ まあたルースが勝手にギアドに乗って出ただと！  
！？ 貴様ア、どうしてもっと

早くそれを報告しなかったあああ！！」

「ひ、ひいいいいいい！！」

正に鬼の形相でエオードは激怒した。隊員はそんなエオードを見て失禁寸前で青ざめる。

女性は近くにいるにも関わらず怒るエオードを恐れもせず、出てきた名前が気になっていた。

「ルース？」

「　　」

勝手にギアードを持ち出したとされているルースは、お気に入り  
の曲をかけてフライトを  
楽しんでいた。曲は「BLUE SKY」というロック系である。

「ブルブル」

『ルウウウウス！！！！』

「！！！！！！」

突然の通信、そして大声で一瞬ルースの意識は飛んだ。  
機体は急落下して、地面スレスレの所でルースの意識は帰ってき  
た。

「だっ、だれだああ！　もう少しで死ぬ所だったぞ！」

ルースが叫んだときには目の前にヴィジョンが出ていた。そこに  
はエオード隊長が  
映っている。それにルースは絶句した。

『誰に口を聞いている？』

「隊長　　！！？」

もう言い逃れのできないルースは、死を覚悟した。

『貴様：これで何回目だ！？　ギアードで出れば敵に気付かれるか  
もしれないというのに、貴様は

いつもいつもいつも！！ 脳が湧いてるのではないか！？」  
「う、ごめん、ごめんって隊長！」

ルースは誠心誠意を込めて謝るのだが、謝り方も過去のものと同じだった。エオードは溜め息を吐いてこれ以上は時間の無駄だと悟った。

『…もういい。さっさと戻ってこい』  
「わかりましたー」

ケロッと態度を変えるルース。ヴィジョンに映るエオードはもう諦めているのか深い息を吐くのだった。

その時、ルースの機体の中でWARNINGの文字が出てけたましい非常サイレンが操縦席に鳴り響く。

「あ、隊長。敵に発見されちゃった」  
『何イ！？ だから言っただろう！！』  
「ごめんって！ …2機、2機だ。速さから言って多分フライヤだと思う」

レーダーに反応する二つの点が、徐々にこちらへと迫ってきている。

『高速飛行型のフライヤか！？ お前の乗るエベリイでは歯が立たん！ 2機は無理だ、逃げろ！』

「隊長、フライヤ相手じゃエベリイで逃げるの無理だって。とりあえずやってみるわ」

『何！？ お、お前まさか…ルース！ 無茶はよ』

途中でルースはヴィジョンを消した。舌なめずりをして、これから起こるだろう戦闘に胸を躍らせるような表情をしていた。

「へへっ、2回戦の始まりってか？面白くなってきやがった！」

戦闘機型ギアード・エベリィは全速で敵のいる方へと飛んでいった。



## #1: Departure vol.1 (後書き)

始めましたGEARD、いかがでしたでしょうか？

まだ始まったばかりでいかがでしたかは無いとは思いますが…。

次回はいよいよバトル開始です。

## #1: Departure vol.2

レード星の宙域にはセイバース隊の監視衛星がいくつも漂っている。当然敵が来るものなら

探知してセイバース隊の基地へと情報が送られるのである。

その監視衛星に不穏な影が迫っていた。それは誰が見ても圧倒される大きさ、クジラを思わせるそのフォルムは

1000mはある。それは超巨大戦艦であった。赤く塗られた機体は多くの軍人の血を吸ったかのようなのである。

その中のブリッジでは、ルースの乗るギアードがモニターに大きく映し出されている。それを豪華なシートに座った女性が見ていた。

その女性はとても人とは思えない美貌を兼ね備えていた。長く伸ばした美しい金髪の髪は神秘的な物を

感じさせ、大きく開けた胸元からは豊満な谷間が見られ男なら誰もが唾を飲み込む程艶かしい。そしてどの

宝石よりも美しく見える蒼い瞳は見るものを魅惑し、吸い込ませるだろう。女神でもあり悪魔とも言える

その絶世の美女は、指令する位置にいる事からどうやらこの戦艦を指揮する者である事が見受けられる。

「どうなるかしらね？ 彼、二機のフライヤ相手にあんなギアードで勝てるかしら」

金髪の女性は、座り心地のよさそうな椅子に座りモニターを楽しそうに見ている。すぐそばの

オペレーターは彼女の言葉に苦笑する。

「大佐、いくら奴が「青き一閃」であってもそれは無理な話です。

あのようなギアードでフライヤを…」

「いえ、もしかするとやるかもしれないわよ?」

その女性の微笑みに、オペレーターは少し戸惑う。

女性の表情は、既に結果が見えているような感じだった。

~~~~~

「うわ、やっぱりフライヤだよ」

あと500mまで迫ったルースは敵の機体を確認する。

フライヤ

高速飛行型ギアード。一見エイのような体型を思われる機体で、変形機能が搭載されており人型にも

なれる。レノス軍では大量に量産されている機体で、そのスピードはギアードでも上の域にある。

『なんだあゝ? 普通の戦闘機タイプじゃねえか。楽勝楽勝!』

意気揚揚とフライヤに乗るレノス兵はルースの乗るエベリイに迫る。そのスピードはエベリイの

2倍はある。青い機体の色は、まるで空に溶け込むようだ。

「やれやれ、こっちは普通も普通、民間にも使われているような奴なんだぞ?」

ルースの嘆きも空しく、フライヤは攻撃を開始した。

「わっ、わっ！」

フライヤは前方にある機銃で、エベリイを威嚇するかのよう
に弄ぶ。いくら威力のない機銃
といってもルースの機体では洒落にならないのだ。

「くっそ！ やってくれるじゃねーの！」

『へっへ！ そろそろ落としてやるかあ？』

フライヤから今度はレーザーが飛び交う。それを当たる寸前でエベリイは避ける。

『なにぃ！？』

「ふうー。…奴らを倒すにはこの…」

ルースは、モニターで自分の機体の武器を映す。そこには誘導ミサイルが二基搭載されている。

「本当はビームもあるんだけど、急に持ち出したからエネルギーが充填されてないんだよね。これしかないか…。エベリイってあまり武装が無いからな。……よし…！」

ルースの目の色が変わる。それはいつもの陽気な彼の目ではなく、戦闘の世界の殺伐とした目だ。

『このやろ！ 落ちろ雑魚が！』

必死に攻撃するレノスの兵士だが、2人がかりでしかも戦闘力も上のギアードを操っている

にも関わらず、ルースの操縦するエベリイには一度も当たってもいない。

「チャンスは一度、二機が交差する一瞬で！」

レノス兵の動きは、ルースの周りを旋回しながら攻撃するというものだった。ルースは数十秒程度で敵の攻撃パターンを見破った。

『何で当たらないんだあ！？』

「今だ！」

二機が交差した瞬間、ルースはミサイルのスイッチを押した。機体の両サイドに搭載されているミサイルが、ボシュ、という音を上げてフライヤ目掛けて飛んでいく。

『わっ、わあああ！！』

『くるなっ！　くるな』

『

レノス兵の叫びも空しく、誘導ミサイルが後を追って見事に命中した。爆発と共にフライヤは広い森林地帯に落ちていった。

「YES！　ふいー、ギャンブルだったなあ、今のは」

安堵の息を吐き、ルースは殺伐とした表情から元の笑顔に戻り、エベリイをセイバース隊の基地へと帰還するのだった。

~~~~~

「そ、そんなバカな…！」  
「だから言っただじゃない」

リード星に近づいている巨大戦艦のブリッジ、驚くオペレーターとは対称に予想通りとばかりに  
金髪の女性は微笑んでいる。

「あんなオンボロで、フライヤ二機をた易く撃破するとは…」  
「…さてと」

椅子から立ち上がる金髪の女性。スラッと伸びた綺麗な足は他の女性が見れば  
嫉妬する程。女性は通信機に手を回した。

「どう？ 準備はできた？」  
「問題ありません。いつでも回線をジャックできます」  
「フフ、それじゃあ回線開いて」

~~~~~

「ルース・ドラッド、入りまーす」

戦闘の後、ルースは隊長に呼び出された。どうやら、彼にもレノスの軍備拡張を
伝えようと隊長は考えているようだ。彼が扉を開いたのは隊長室の扉。そこにはジョン、ターニア

隊長、そして昼の食堂を通った女性がいた。

「うおっ！？ どうしたんだよみんな集まって…それにアンタは食堂にいた…」

「ルース、この人は…」

ジョンがルースにその女性の事を紹介しようとした時だった。

『こんにちは、惑星レードのみなさん』

「！！！！？」

突然、隊長室に澄んだ女性の声が聞こえる。その声はあの金髪の女性なのだが、ルース達を知る訳無かった。

『私はレノス軍レブドア隊隊長、レサティア・ヴォルゲイン大佐と言います』

「レノス！？」

そのあまりにも突然の事にルース達は動揺を隠せなかった。エオードはすぐにヴィジョンを出し通信士を呼び出す。

「何だこれは！？」

『今、調べます！』

「いきなり何だってんだ、無線か！？」

ジョンはターニアを見るが整備士の彼女は腕を組んでどんな方法でこんな通信をしてきているのか
思案しているようだった。

『突然ですが、失礼します。これから私達はこのレード星を制圧します。至る所を“消す”つもりです』
「何だつて!？」

声を上げたのはルース。あまりにも恐ろしい事を言うレサティアと名乗る者の口調は、いかにも楽しげな
感じで、それが人を馬鹿にした風で聞く者を恐れさせ、苛立たせる。

『これは警告ではありません。“脅迫”です』

全ての回線をジャックしたのか、レサティアの“脅迫”はレード星全土に伝わっている。レード星の人々は徐々にその脅迫に恐怖を感じ始めていた。

街の喫茶店でも

『死にたくなければ早く逃げてください』
「なっ、なんなんだこれ!」
「なんか、やばいんじゃないの!？」

街の大通りでも

『抵抗する人は、容赦せず“消します”』
「やべーぞ!」
「逃げろ!」

『まずは「大都市」から…消えてもらいましょうか?』
「「うわああああ!」!」
「「キヤアア!」!」

それを聞いた大都市の人々が、パニックに陥った。ハツタリと言
い張っていた者もやがては
他の人々の悲鳴で恐怖が感染して全ての市民が混乱を極めるのは、
大して時間は掛からなかった。

セイバース基地隊長室では、怒りに満ちたエオードがその突然の
出来事に腹を立てて机に
拳を叩きつけた。その目はこのような事態を招いたレサティアへの
怒りで覆われていた。

「奴らは何処にいる！！！」

『通信を逆探知した結果、敵はレード星の真上にいます
！』

「何故今まで監視衛星が気付かなかった！？ 何をやっていたんだ
貴様らは！」

『も、申し訳ありません！！ 恐らく敵の戦艦は高度なレーダージ
ヤマーを搭載しているらしく、ここまでの
接近を許してしまいました！！』

今ここで部下の怠慢を叱咤しても意味が無い。エオードは怒りを
抑え、冷静に状況を判断する事に
する。隊員の通信は止まらず

『データに無い戦艦です！ お、大きさは1kmを超えます！！
しかも今、巨大な熱源を探知！

…これは恐らく主砲のものとされます！！』

「！！！！」

今がどれだけ危機的状況に晒されているのかを実感し、ルース達は驚かされる。

「どうやら敵さん、マジみたいっすよ！ 隊長！-」

ルースはエオードを促す。それにエオードは頷き立ち上がった。

「うむ！ 考えている暇は無い！ これより-」

出撃 と言いかけた所でまたレサティアの通信が響き渡る。

『ああ、それとセイバース隊の皆さん。変な気を起こさない方があなた達の身のためですよ？-それとも自信の方がありません？』

最後には嘲笑も含めて、レサティアの通信は終わった。皆はエオードの言葉を待っていた。怒りに身を奮わせたエオードは、静かに、そして力強く言い放った。

「これより、セイバース隊は敵の迎撃に向かう！！-」

「了解！！-」

#1: Departure vol.2 (後書き)

いかがだったでしょうか？ 次はいよいよ両軍入り乱れての戦いが始まります。果たしてルース達はレサティアを止められるのでしょうか？ ご期待ください。

#1: Departure vol.3

セイバース基地・格納庫。そこにはセイバース隊のギアードの全てが置かれている。

緊急なのでその忙しさは半端でない。整備士班長であるターニアは整備士達に指示を出す事で忙しさを増していた。

「ほら　！！　早くしないとビームで灰になるよ！　急いでギアードを収納！」

セイバース隊の戦艦、「ソードガッシュ」に、次々とギアードが搬入されていく。名前の通り剣に似た戦艦は約400m。赤く塗られたその船体は敵を切り裂き、血を吸ったような猛々しさがあった。

「はやくしろー！」

「急げえ！」

「合点！」

整備士達の声は、格納庫全体に響くほどだった。

ソードガッシュ・ブリッジ

ブリッジはエオードの座る指令席があり、一つ下の段差にオペレーター、通信士、操舵士の席が

ある。更にその一つ下の段差には対空砲火などを操る者の席が5つある。どの席にも専用のテーブルがあり

そこにはヴィジョンを使った電子モニターが浮かび上がっている。前には180度の大きなメインカメラがあり、それで外の状況を肉眼で見る事が出来る。

「この人はセンドラド本部から派遣されたマリエーヌ・プラティカさんだ。今日から副司令兼オペレーターをやるそうだ」

ジョンは黒髪の女性、マリエーヌをルースに紹介する。

「よろしく、ルース君」

微笑んでマリエーヌはルースに右手を差し出す。ルースは新たな仲間に喜んで握手をした。

「ああ、よろしくな！ マリエーヌさん」

「フフ、「マリア」でいいわよ。 “ルース”」

「ルース君？」

マリエーヌもといマリアは自分をあだ名で呼ぶようにするだけでなく、自己紹介でいきなりルースにあだ名をつけた。

「ルース君って、俺の事っすか？」

ルースは何故自分にあだ名をつけたのか、その訳を聞きたがった。そうするとマリアはその名に相応しい微笑みで答える。

「ルースって聞いた時から決めてたの。ルースって呼ばうって」

「ハハッ、面白い人だなマリアさんって。うん、それでいいっスよ」

大人びた容姿とは裏腹にその無邪気さは可愛らしく思える。はにかみ合う二人を見て、端では楽しく話しているのを恨めしく思うジョンの姿があった。

「話はそれぐらいにしておけ」

「ういっス」

指令席に座っているエオードがルース達の方を見ないで注意をかけた。その一声ですぐにルースもマリアもスイッチを切り替えたように表情を変える。

「よし、現状報告！」

隊長席の下方にある席にいたオペレーターは、エオードの掛け声で手馴れた感じで浮かんだパネルを押して情報のあるファイルを開く。すると様々な文字の羅列が浮かび上がった。オペレーターはそれを読み上げていく。

「現在、敵のものと思われる巨大戦艦がレード星宙域に留まっている模様。主砲を大都市へ向けてチャージ中、恐らく後20分程で発射されるかと。監視衛星は2分前に破壊され、それ以前の映像に映ったものからギアードを15機ほど確認。大気圏を突破後すぐに交戦の可能性大！ 全隊員、乗り組み終了！」

「時間が無い！ 一番スピードのあるソードガッシュが迎撃に向かう！ 残りの戦艦は大都市を死守！」

繰り返す、ソードガツシュは迎撃、他の戦艦大都市を死守だ！ ソードガツシュ発進ッ！！」

エオードの命令により、一気にソードガツシュは浮上して辺りに強風を巻き起こしながら発進した。基地を後にして…

レード星の頭上に迫るレノスの巨大戦艦「ヘルシャークナル」。
そのクジラとも思わせるフォルムの

尻尾ともいえる所にカタパルトがある。そこから次々とギアードが出てくる。既に戦闘準備は完了と言った

感じである。ブリッジにはあの金髪の美女、レサティア・ヴォルゲインがその光景を楽しそうに

見つめている。その微笑みは天使のものが、悪魔のものが。

「敵艦、上昇してきました！ 距離4000！」

「フフフ…やってきたわね。【選定者】に相応しいか見せて貰うわ。

「青き一閃」さん」

「うおおおおお！！」

猛ダツシュでルース達パイロットは艦内を走っている。行く所は無論格納庫である。無重力の宇宙空間にいても艦内で走れるのは重力制御しているからである。

「はい一着！ 準備はOKかターニア！？」

「はいよ！ 早く行って来い！」

ターニアに一声かけてルースは自分の機体の下へ走る。約20m
くらいの巨人はそこにいた。蒼く

輝くその人型のギアード【スピニオン】はルースの愛機である。通常このスピニオンの基本色は黄色なのだが

ルースの嗜好で特別に塗り替えている。スピニオンは人型でも飛行形態のフライヤに近づく機動力を持ち

最大出力で動くと閃光のように見えるので、「青き一閃」の異名を持っている。

「頼むぜ相棒！」

威勢良くハッチを開けてギアードのコクピットに乗り込むルース。起動スイッチを押すとスピニオンの

目に当たる部分が光る。ルースは銃が握り締める部分だけになったような2本のトリガーを握った。

『GO!!』

ソードガツシュよりスピニオンが出撃した。無限に広がる宇宙を背に青い一閃が煌く。

『おいジョン、敵さん、相当多いぜ?』

レーダーに映る敵ギアードは20を超えていた。ソードガツシュに搭載できるギアードはせいぜい

15機。だが、状況が状況だけにそれは仕方無い事だ。

だがそんな状況にも関わらずルースは臆せず、むしろこれから起こる戦いに胸を躍らせるような感じだった。不謹慎ではあるが。

『ルース、ここは俺達に任せてスピニオンで敵を振りきれ！ そしてあの馬鹿デカイ奴に一発

食らわせてやれ！ 出来るな！』

『ああ、任せろ！ 死んだら承知しねえぞ？』

『誰に言つてやがる』

ジョンは親指を立てて白い歯を剥き出しにした。それを見てルースはもう何も言う事がない事を悟ると敵ギアードの群れへとスピニオンを突っ込ませていく。それをジョンや他のパイロット達は援護する形で後に続いて行った。

ソードガツシュのブリッジは敵の分析で大忙しだ。オペレーターが必死になって分析に勤しんでいる。

副司令である MARIA もオペレーターを務めていた。

「全ギアード出撃！ ルース機だけ先行しています！」

「スピードはスピニオンが一番だ。20機以上のギアードを突き抜けるのは奴しかない」

20機以上もいる所を真正面から突っ切ろうとするなど自殺行為もいい所だ。しかしセイバース隊の

誰もがそれに口を挟まない。今日から配属となった MARIA はそんな光景に驚いていた。

「信頼、してるんですね」

MARIA はエオードのすぐ隣、副司令席にいる。エオードは何も言

わなかったがそれが
答えだとマリアは悟った。

「敵戦艦の主砲発射まで、後5分！」

「くっ…時間は無い！ ソードガッシュ前進！ 多少の被害は構わ
ん、突っ込め！」

「了解！」

本来、戦艦は前に出るべきではないがそんな悠長な事を言ってい
る場合ではない。

「大都市に向けた主砲が、こちらに来る可能性は考えられないでし
ようか？」

マリアは考えていた。これがセイバース隊の精鋭を一掃する作戦
ならばそれも有り得ると。だが
エオードは首を横に振った。

「いや、それは無い。あの手の輩はやると言ったら必ずやる」

豊富な経験からエオードはそう断言する。確かにあのレサティア
とかいう女は危険だ。普通じゃ
ない。絶対に禁止とされている一般市民への無差別攻撃をしようと
しているのだ。

「それはそうと、ルー君は大丈夫なんですか？ たった一機であの
大群に…」

「マリア君、見ておくといい。奴が「青き一閃」などと呼ばれてい
る所以を」

『撃て　　！！』

2体いるレノスの人型ギアード、「ヘルム」の銃撃をそのスピードでスピニオンは避けまくっている。

『くそっ、何て速さだ！』

『おらぁ！　邪魔だ　　！！』

一時の方向から来るスピニオンに2体のヘルムは必死にビームブラスターで撃つが、全然かすりもしない。

『HYU！』

高速でその2体に迫るスピニオン。ルースは確実にビームブラスターの照準をヘルムに合わせた。そして…

『なっ…』

『BANG！』

スピニオンの左手のビームブラスターが火を吹いた！

『う、うわあああああ！！』

コクピット部分にビームが命中したヘルムは爆発音と共に宇宙に散っていった。

『YES！』

勢いよくルースはスピニオンを巨大戦艦ヘルシャークナルへと突き進むのだった。

青く輝く一閃が、次々とレノスの機体を避け、撃破するのをまるで映画でも楽しむように見つめる女性、レサティア。微笑みながらブリッジでその様子を見る彼女は、スピニオンが迫ってくるのを望んでいるようにもとれる。

「フフ…さすがは「青き一閃」と呼ばれるだけはあるわね」

自軍の兵が、次々に倒されているのに彼女はまったく動じていない。その余裕の笑みは不気味な物を感じさせる。

「でも、もう時間がないわよ？」

『ビーム発射まで、後…1分です!!』

『チッ、もうそんな時間かよ!?!』

セイバース隊のパイロット全員に残酷な通信が響き渡る。ジョンは冷や汗をかくのを感じた。

『くっ!』

その不意を突かれたのか、ジョンは敵のビームを防御する形に持ち込まれてしまう。そして、ジョンの目の前に彼の考えもしない光景が広がっていた。

『……おいおい、マジかよ…!』

リーダーに映る数の敵の表示が増えていく。それは一つや二つどころではない。おびただしい敵信号の点が
どんどん現れていく。

『こいつら… “さらに増えてる”…！?』

ルースやジョン達が落としたギアードはおよそ10機。しかしヘルシャークナルから更に出撃してきたギアードは推定50機。合わせて60機超。セイバース隊の機体の数は残り12機、とても勝てる数では無い。ジョンは回りの仲間と陣を組み防戦一方となってしまうた。

『うわあああ!』

レノスのギアード・フライヤのビームプラスタが、セイバースの人型ギアード「バーム」に直撃する。その機体は爆散して宇宙のもくずの一つとなった。丁度、ソードガッシュを守っていたセイバース隊員を襲った悲劇だった。

『うわああ!』

『助け…』

ブリッジでは、その場面を間近で見たマリアが顔を青ざめる。そんなマリアを見てエオードは声をかけた。

「君は、あまり戦場に出た事は無いのだったそうだな」

「ええ……。事務でしかたから…」

そんな話をしている内にオペレーターの口から次々と現実を突きつけられる。

「敵ギアード、さらに増大…20機です。我々との数、約60は違います…。ビーム発射、30秒前です…」

メインオペレーターも、平静を装っているが明らかに顔は青ざめている。何故なら、彼らにとってこんな絶望的な状況は初めてだったからである。エオード隊長は歯を食いしばって仲間の死を悔やむ。

「駄目押しか…元より勝てる相手では無かったのか…くそっ！初めからこうするつもりだったのか…ふざけおつて…！」

余裕の正体を明かしたレサティアは、座席から立ち突然笑いだした。純真無垢な子供のように、まるで遊びを楽しむような、そんな笑い方を彼女はしている。

「アハハハハハハ！！　ハハッ、ハハハ！」

ヘルシャークナルの主砲エネルギー充填が終わろうとしている。そう、リード星大都市の最後が迫っているのだ。

『19…18…』

絶望のカウンtdownの中、必死に戦うセイバース隊。ジョンは仲間達を必死に守り、エオードはソードガッシュに

迫るレノスのギアードに必死の抵抗を強いられている。

そしてルースは…

『くっそおおおおお!!』

スピニオンのスピードを最大出力まで上げてヘルシャークナルに迫る。しかし、その距離はどう計算しても後20秒はかかる。それにレノス兵の守りも厚くまさに絶望的であった。

『8…7…6…』

『間に合え……あそこには戦争には関係ない人たちがいるんだぞ？スピニオン、頑張れ!!! 早く…もっと早く!!』

『邪魔させるか!』

ルースの嘆きも空しく、スピニオンの動きを止めようと周りに5機のギアードが囲む。…もう、間に合わない…

『やめろ……やめろおお!! うおおおおおおお!!!!』

まるで星が爆発でもしたかのような音が光と共に宇宙の戦場に響き、ヘルシャークナルから放たれた主砲は、寸分の狂いも無くレド星の大都市に向かっていく。そして間もなく、主砲は大都市を焼き払った。

跡形も無く、全てを消滅させて…

#1: Departure vol. 4

巨大戦艦ヘルシャークナルの主砲によりリード星の大都市は焦土と化した。その事実はいさばーす隊全員を絶望の淵へと追いやった。

故郷を破壊された者、ヘルシャークナルの強大さ、自分たちのせいで大都市が破壊された責任感、様々な気持ちで隊員に駆け巡る。その中でも一番間近にいて止められなかったルースに走る衝撃は一番大きかった。

『……あ……ああ、あああああああああああああああ
あ……!』

彼の中で“何か”が弾けた。それは怒り、悲しみ、悔しさ、様々な感情が混ざりあった。複雑で形容の出来ないモノ。

「なっ、何だあのスピニオン！」

「…スピニオンが輝いていやる！」

ルースの人間とは思えない咆哮と共にスピニオンが眩しく輝いた。本来、スピニオンに光り輝く機能は無い。そもそもギアード自体、そのような機能は無い。しかし何の冗談かいきなりスピニオンは輝き出した。だが変化はそれだけではなかった。何とルースの髪が青から金色へと変色していく。

「許さねえ……お前ら……お前らあああああ！！」

憎悪に満ちたルースの顔は今までの彼からは想像もつかない歪んだ形相だった。呪詛のように放たれる言葉は目の前にいる敵達に、そしてその奥にいるヘルシャークナル、そしてそれに乗るレサティアに。

『……どけよ』

『へ、へへっ、どんな機能かは知らないが5機に囲まれて勝てる訳が』

それは一瞬の出来事だった。

スピニオンの前に出てきた一機のヘルムの胴体から拳が突き出た。その拳はスピニオン。周囲の者達には

スピニオンがいつ接近し、ヘルムの胴体を拳で突き破ったか分からなかった。知覚できなかった。深く

突き刺さった腕を引き抜き、既にパイロットのいないヘルムを滅多打ちにし、ビームを撃ち爆発させる。

それは死者になろうとも殺し、消し去ろうという意味が取れた。

レブドア隊のパイロット達は目の前にいる

理解不能の存在が理屈抜きで怖かった。

神々しく光り輝くスピニオンを、レブドア隊のパイロット達は地獄に住む悪鬼にしか見えなかった。

『ち、ちくしょおおおおおおお!!』

『馬鹿、よせっ!!』

恐怖で焦ったのかフライヤに乗る者がスピニオンに攻撃を仕掛ける。だが音速を超えるスピードを誇る

フライヤの接近には勝てないだろうと周囲は“期待”、いや、“望んで”いた。

しかしその淡い想いは一瞬で打ち崩された。スピニオンと交錯し

たフライヤは数発の拳を叩き付けられ
爆発、宇宙へ散っていった。たった一瞬の内ですべて音速のフ
ライヤに攻撃できたのか？　だがこれで
今のスピニオンが尋常ではない事をレブドア隊のパイロット達は確
信した。だから一目散にその場から
逃げ出し始める。

『逃げるな』

だが、逃げる事すら敵わなかった。
スピニオンは逃げ惑う敵ギアードを次から次へと破壊していく。
それは一方的な虐殺だった。

普段のルースならばこんな事はしないだろう。命を命とも思わな
い常軌を逸した暴虐。あつという間に
5機のギアードはスピニオンによって無残に破壊され、散っていっ
た。だがそれでもルースの怒りは
治まる事を知らない。

『死ね……死ね……許さない……絶対にい……うおおああああ
あああああああああ……！』

「おいおい……何が起こってるんだ？　ルースに……」

ソードガツシュの格納庫。今は退却したジョンがモニターでスピ
ニオンの謎の現象を見ていた。もちろん
ソードガツシュにいる誰もがこの異常な事態に驚きを隠せないでい
た。

『一体……ターニア、スピニオンにあのような装置があったとは聞い

てないぞ!？」

「しっ、知らないよ隊長。あんな機能付いてる訳がない!」

整備班長のターニアでさえ、今スピニオンに何が起こっているのかわからなかった。

「通信は? マリエーヌ君!」

「それが…どうやっても繋がらないみたいなんです」

オペレーターに聞く所、まるでスピニオンが通信妨害でもしているかのように一切通信が繋がらないのだという。その間にも輝くスピニオンはその神々しさとは裏腹に鬼神の如く敵を一方的に殺していく。普段のルースを知るエオードは、スピニオンの戦いぶりが信じられなかった。

「ルース…お前は一体…?」

「大佐! レサティア大佐! このままではあの化け物がこちらに…!」

ヘルシャークナルのブリッジでも、突然謎の変化を起こしたスピニオンを見て恐れる者が多数だった。しかしただ一人だけ光り輝くスピニオンを見て笑う女性がいた。もちろん、レサティアⅡヴォルゲインである。

「大丈夫よ。ここは私が出るから、全機に撤退するように伝えて」
「まっ、まさか大佐自ら…!」

「フッフ」

その笑みは女神のようで、悪魔のような二面性を帯びていた。

『あああああああああああああああ！！』

本能のままに狂い、レブドア隊のギアードを片っ端から破壊し尽くすルース。しかしどうやっても通信ができないはずのコクピットに声が響き渡る。

『もう少し落ち着いたらどう？ ルース・ドラッド君？』

『！！？ その声…その声…その声ええええええ！！』

その声は先ほど聞こえた女性のものだった。美しく、それでいて身震いしてしまう艶のある声色。しかし今の

ルースには殺意を沸き立たせる声にしか聞こえない。彼の顔が、普段彼を知る者なら顔を背けたくなるほど憎悪に

歪んだ。大都市の、多くの命を奪った張本人がすぐ近くにいるのだから尚更であろう。

『どこにいやがるっ！！？ 出て来い！ 殺す…お前だけは絶対に殺すッ！！』

『…そんな事も気づかないの？ 後ろにいるじゃない。さっきから』
『！！！！？』

彼が、スピニオンが振り返ったその先には一体のギアードがあった。白銀に煌き、後ろにある羽のような
パーツはまるで天使、いや、女神を思わせる神々しさと神秘さを兼ね備えていた。ルースは不覚にもその美しさ

に一瞬目を奪われた。それがとても屈辱だった。

『それでも本当に「青き一閃」と呼ばれているの？　まだまだ坊やね』

（な…いつから後ろに！？　レーダーにも出なかったし、それに機体の影すら見えなかった。あんな…あんな目立つ機体なのに…）

ルースはあと数年で成人とは言えまだまだ子供だ。だがそれでも「青き一閃」と呼ばれ並のパイロットなら相手にもならない実力を持っている。それをあっさり後ろを取られたことによりルースは言い知れぬ恐怖を感じそれが上手く作用して落ち着きを取り戻していた。それと同時にスピニオンのオーラのような輝きは消えていき彼の髪の色も青に戻った。するとルースは辺りを見回す。

『……………？？　何だ？　俺、今までどうしてたんだ…？　それにあのギアード…』

『どうしたのかしら？　ルース・ドラッド君』

『…！！　その声、お前は…！！』

ルースはまるで先ほどまでの記憶が無かったかのように振舞う。それは事実だった。ルースには大都市が焼かれる所からここまでの記憶が無かった。ルースにしてみればいきなり目の前に謎のギアードが現れたように感じたのだろう。不思議な体験にルースは訳が分からなかった。

「何だあのギアード？　あんなの見たこともない！」

ソードガツシュの格納庫にまた衝撃が走る。レノスのギアードにも精通しているターニアでさえレサティアの乗る「レンジエル」という機体は知らなかった。そしてその神々しさと共に感じる異様さは量産機では有り得ないことをターニアは悟った。予想されるのはあれが隊長機、それも特注品だということだ。

「スピニオン、元に戻ったみたいだぜ？ あの謎の輝きも引っ込んでどな」

ターニアと共にモニターを見るジヨンは嫌な予感がした。あの異常な強さを発揮したスピニオンですら謎のギアードの接近を許してしまったのだ。只者ではないとジヨンは感じていた。

「ルース、気を付けろよ……！」

謎のギアードと対峙して、ルースはそれに乗るレサティアに怒りを含ませて尋ねた。

『どうして…どうして関係ない人達を！ 自分が何をしたのか分かってるのか！！？』

一般人をどんな理由であろうと殺すのは条例違反だ。銃殺刑は免れない。だというのにレサティアはそれはいとも簡単にやってのけた。もみ消そうにも規模が大きすぎる。となるとレサティアはそれが許される信じられない権限でも持っているのだろうか？

だがそんなことルースにはどうでもよかった。人として、ルースは今の今まで平和に暮らしてきた人々の命を
あつさり奪ったレサティアがどうしても許せなかった。

『分かつてるわ、あれで何人死んだのかしら？　1万…10万…100万？』

『ふざけるな！』

まるでゲームでいい結果が出せたかのように言うレサティアにルースは怒りの声を上げる。レサティアはそれを聞いて心外そうな顔になる。

『あらあら。ねえルース君、もしこれが君の為にやった事だとしたら……どうする？』

『なっ！？　俺の為だって！？』

『そう、君の為』

ルースは呆然とするしかなかった。いくら冗談にしても行き過ぎている。あの大都市を、罪もない人々を消し去ったのは、自分の為だと言う。何を言ってるんだこの女は。

『は、ははは！　何言ってるんだ、そんな馬鹿なことってあるかよ！』

スピニオンが先に出た。拳の甲にあるエネルギーゲート装置を稼働させると拳がエネルギーを凝縮した膜に包まれる。重装甲のギアードですら突き破るスピニオンの武装エネルギーゲートパンチ。スピニオンはそれをレンジェルに食らわせようとするが、レンジェルは紙一重で避ける。

続けてスピニオンは左腕に付いている腕ほどのサイズであるビームシールド、それに内臓されたビームブラスタを連射、しかしそれも避けられてしまう。

『中々の連撃。人型であるスピニオンでそれほどのスピードを出し続けるとGの負担が大きいでしょくに』

『くっ……』

フライヤのような飛行形態ならば音速のスピードを出してもGの負担は少ない。しかし人型であるスピニオン
しかもルースのスピニオンは特別製。スピードもフライヤに迫るものがある。音速に近いスピードならばGの負担が大きい。ルースはもう戦場に出て30分以上になる。身体の負担は限界に近づいている。ルースの息は荒い。

『くそっ……しかもこいつ……』

それでもスピニオンの動きはそこまで落ちてはいなかった。にも関わらずレンジェルは紙一重……いや、紙一重に見せかけて攻撃を避けていく。たった数撃でもルースはレサティアが、レンジェルがどれほどのものか解りはじめていた。

『でも、さっきの君の方が良かったわよ？ 憎悪に満ちた、憎しみの塊のような……ね。フフフフ』

『?? 何の事だ!』

『……やはりね。憎しみによる「力」の発動は憶えていない事が多い……』

『だから、一体なんなんだ!?!』

ルースにはレサティアの言葉の意味が解らなかった。レサティアは光り輝いていた時のスピニオンのことを言っているのだろうが、ルースには知りようがないから仕方が無い。だがその原因すらレサティアは知っているようだった。

『さつき私は大都市を消滅させたのは君の為だと言った。それは君の「力」を引き出す為に必要不可欠なことなのよ』

『俺の力…？ でたらめなこと言って！』

スピニオンの拳が遂にレンジェルに命中する…のだが、レンジェルには傷ひとつ付いていなかった。スピニオンの拳はレンジェルの手前で見えない何かに阻まれていたからだ。

『なっ…バツ、バリアか！？』

『少し違うわね。このレンジェルにはどのような攻撃手段も寄せ付けないし、受け付けない。そんな』

『絶対的なフィールドを常に身に纏っているのよ』

『な…？ なにを…言ってるんだ？』

拳が阻まれたことへの説明を聞いたルースだったが、まるで理解できなかった。この女は一体何を言っているのだろうと。未知の機体に未知の能力。そして、まるで得体の知れない存在にルースは思考をパンクしかけていた。

『フフフ…信じられないのも無理ないわ。信じられないついでにもう一ついいものを見せてあげる』
『！？』

スピニオンは突然動きを止めた。いや、止められた。スピニオンの周囲に何かが浮かび上がった。それは物語で見るような魔法陣のようなもの。

『なっ、何だこれっ!?!』

『そうね…【結果】とでも言っておこうかしら。わかり易く言うと君のスピニオンは鎖でがんじがらめに縛られたようになってるのよ。絶対に抜け出す事は出来ない』
『なんだって!? そんな事がギアードに…』

彼女の言う通り、どんな事してもスピニオンは身動きが取れなかった。最早レンジェルのしている事はギアードの領域を逸脱している。そんな馬鹿げた事をするギアードなどルースは知らない。

『ルース君、今ここにある事が真実。この宇宙に説明できないことなんて幾らでもあるわ』

『…こんなデタラメ…くそっ、動け! 何で動かない!?!』

ルースには彼女の言う事が理解できなかった。彼の見限リレンジェルはれっきとしたギアードそのもの。しかし今、まさに目の前で信じられない事やってのけているのだ。信じざるを得なかった。それがどれだけ滅茶苦茶な事だとしても。

『くそっ……。……ハハッ…滅茶苦茶だよアンタ。…殺せよ』

勝負は決した。ルースは死を覚悟した。しかしレサティアの口から予想外の言葉が飛び出した。

『殺さないわよ、君は』

『……は？』

一瞬、ルースは何を言ったのか理解できなかった。しかし、これほど超常的な力を持ちながら今まで

殺されなかった事を考えると、自分は初めから遊ばれていたのだと勘付いた。だがそれでは彼女の意図が解りかねる。

『アンタ…一体、何がしたいんだ……？』

『……君は私と同じ、【選定者】なのだから……』

『選定者……？』

初めて聞く言葉にルースは首を傾げた。こんな馬鹿みたいに強い女が自分と同じ？　ますますルースは訳が分からなかった。

『その選定者ってのは何だ！？　それに、俺はアンタなんかと同じじゃねえ！　…アンタみたいな悪魔とは！』

『フフ、今は分からなくてもいいわ。でもその内、嫌でも分かることになるのよ…。君は大いなる渦の中心にいるのだから…』

『…逃げるのか！？』

意味ありげな言葉と共に、スピニオンに背を向けるレンジェル。

羽ばたく翼は天使のように見えるはずなのにルースにはそれが悪魔の翼にしか見えなかった。

『ごめんなさいね。私、今からリード星にある君達の基地を全部制圧しなきゃならないの。もう少し君と遊んで』

いたかったけど、これ以上は何も意味を成さない事が分かったから」
「…降下する時には無防備になるぞ。ソードガッシュの主砲で、アンタの戦艦を撃ちぬくぜ？」

通信マイク越しでレサティアに言うのだが彼女は何故か笑う。それがルースの癪に障る。

「何がおかしい」

「ヘルシャークナルは今も君達の戦艦に照準を合わせているわ。私がいいと言えはいつでも撃つ事ができるのよ？」

「そんなハツタリ…」

「ハツタリじゃないんです」

突然スピニオンのコクピットに響き渡るのはレサティアとは別の女性の声。それは出撃前に会ったあの女性のもの。

「え？ その声…マリアさんか？」

ルースのコクピットに通信してきたのはマリア。準じてヴィジョンが浮かび上がった。彼女は先ほど見た笑顔と違ってやや青白い表情をしていた。

「敵の戦艦からは、まだエネルギー反応があるんです。どうやら最初から2発分のエネルギーを充填していたんです…」

「そ…そんな…」

「そういう事なのよルース君。もう、君達に出来る抵抗はなくなつたのよ」

レンジエルはスピニオンから離れていく。だがルースはそれを許さない。例え身動きがとれなくても。

『レサティアアッ!』

『そう、猛りなさい。そして、私を恨みなさい。君が私を殺せるだけの力を手に入れられるか…期待しているわ』

やがてレンジエルの姿はヘルシャークナルへと消えていき、それと同時にヘルシャークナルはレード星へ

降下を始める。レンジエルが離れ、スピニオンを縛り付けていた陣は消えて動きがとれるようになった。しかし

ルースはもう追う事はしなかった。敵が自分達の惑星へ降りようとしているのを、ルース達は見ている事しか出来なかった。

『目の前に…目の前に敵がいるのに、敵が俺達の星を消そうとしているのに、何もできないなんて…何もできないなんて…!!』

自分はまだ動けるのに、敵がこれから侵略をする所をただ見る事しか出来ないのである。これ以上の屈辱は無い。

完全な敗北。ルース達セイバース隊はあっけなく負けてしまった。スピニオンはずっとその場で動かず

ルースは齒を食いしぼりヘルシャークナルが降りていく所を見ている。この敗北を忘れないように、あの敵を心に刻みつけるように。

しばらくして、スピニオンにソードガッシュが近づく。仲間達のヴィジョンが次々と現れ心配の声をかける。彼ら

の声を聞いたのが心の助けだった。

『……負けた……』

ルースはぽつりと呟いた。ここまで圧倒的に負けたのは、青き一閃と呼ばれてから初めての事だった…

~~~~~

「お、おいルース！」

ソードガツシユの格納庫。回収されたスピニオンから、降りるとルースはいきなり壁を拳で殴りつける。何度も何度も。それを見たターニアはすぐに腕を掴んだ。拳からは血が滲んでいた。

「馬鹿な事を…何やってんだお前！」

怒鳴られても反応の無いルース。俯いて何かを呟いているのをターニアは注意深く聞いた。

「負けた…」

「えっ？」

「俺達の負けた…。何も、出来なかった…」

「…ルース」

悔しさを顔に滲ませてルースは静かに格納庫を出て行く。彼を止める者は誰もいなかった……

「戦死者、10人。読み上げます…」

ミーティングルームでは MARIA が戦死者を読み上げる。それを隅で ルース と ジョン は聞いていた。15人中10人

パイロットが死ぬ事は隊にとってかなり深刻な事だ。ルースに次ぐ実力の持ち主である ジョン も健闘したが

全員を守りきる事は出来なかった。ルースと同じく落ち込んでいるはずなのに、ジョンはルースを慰めようと肩に手を置いた。

「まあ落ち込むな。生きていればいつか奴らに一泡吹かせる事が出来る。死んだ大都市の人々やみんなの為に頑張ろうぜ？」

「……」

精一杯の慰めも、ルースには気休めにもならなかった。普段、風のようにおちやらけた感じのルースが

塞ぎこむように俯いている。ルースはヘルシャーケナルの主砲を止められなかったのが自分の責任だと、自分が

弱かったから大勢の人を亡くしてしまったのだと、責任を感じているのだ。決してルースだけの責任ではないというのに…。

「相当へこんでいるな…」

ジョンの隣にいたターニアは、小声でジョンに言う。ルースの拳を見るとまだ手当てしていなかった。

「……ルースは、昔から背負い込みすぎる癖みたいなのがあるか

らな……。無理もない……」

「ルース、このまま潰れなければいいけど……」

「諸君、聞いてくれ」

マリアが戦死者を読み終えるとその次にエオードが口を開く。その口はいつになく重い。

「…… たった今入った情報だが、レード星に残した第二部隊はレブドア隊によって壊滅させられたらしい……」

ミーティングルームにはセイバース隊の隊員がほぼ集まっていた。だからどよめきは室内を覆った。これでセイバース隊で生き残ったのはこのソードガッシュ一隻のみとなった。クルーは絶望感に打ちひしがれる。

「…… もう我々が帰る場所は無くなった。……我々はこれからセンドラド本部へ赴き、これからの指示を仰ぐ」

いくつもある惑星の内、センドラド軍本部に近いのはレード星だ。孤立してしまったソードガッシュはもう

本部へ向かうしかない。その場の全員が納得せざるを得ない中、一人だけ声をあげた。ルースだ。

「隊長……このまま、このままあいつ等を野放しにしているのかよ！？ 俺だけでも」

「お前も戦って感じただろう……！ お前ほどの男をまるで相手にしないレサティア・ヴォルゲインの強さを……！」

「くっ……」



ルースの叫びは、エオードの怒声にかき消された。彼の言う通り、今またあのレンジェルと戦ったとしても満に一つとルースに勝ち目はないだろう。ルースもそれが分かっていたが、認めたくなかった。

「落ち着けルース！ それじゃまるつきりガキだぞ！」

「……くそ……くそ……」

ジョンになだめられて、ルースは頭を掻き毟って机に突っ伏す。ルースの悲しい叫びはクルーの心を

締め付ける。誰だって、出来る事なら今すぐにでも飛び出していきたいと思っている。だが、あまりにも

敵は強すぎる。だから、顔を俯かせる。それがとても情けなかった。

「まだ諦めてはいかん。我々は生きている！ 悲しむ暇はない、奴らの好きにさせる訳にはいかんっ！！ 我々は

散っていった者達の為にも生きて、戦わなければならない……！！

戦わなければ……」

「隊長……」

何度も机を叩くエオード。その叫びは鎮痛なものだった。それを見てルースは自分がどれだけ子供だったか

思い知る。エオードだって本当は今すぐにでも追撃に向かいたいはずなのだ。だがそれをしないのはそれが

無駄な事だからだ。そんなエオードの姿を見てしまったらもう短気を起こす気にはなれなかった。

「これより……セイバース隊はセンドラド軍本部へと向かう！」

「了解！」

ソードガッシュは宇宙を駆ける…悲しむ暇さえなく。

戦いは始まったばかり……

ルースの悲しく空しい戦いは、まだ始まったばかりなのだ……

TO BE CONTINUED…

## #1: Departure vol.4 (後書き)

第1話はこれで終了です。いかがだったでしょうか？ 色々背景やらキャラの詳細やら何やらすっ飛ばしてしまった事は否めません。それはこれからやっていくにせよ、そこら辺はちよつと失敗してしまっただけかなあと今頃反省してしまっています。駄目ですね、全く。なんか愚痴ばかりですみません。それではまた次回。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6365a/>

---

space war period GEARD

2010年10月20日18時16分発行